

りしかば、家は破て月ばかりむなしくすみ、庭はあれてよもぎのみ徒にまげし、かくまで成にければ、文屋康秀が參河の掾にてくだりけるに、さそはれて、

わびぬれば身を浮草のねをたえてさそふ水あらばいなんとぞおもふ、とよみて、次第におちぶれ行ほどには、ほてには野山にぞさすらひける、人間の有様これにて知るべし、

〔三十六人歌仙傳〕小野小町

承和比人歟、在中將伊勢物語云、文屋康秀贈答、又遍照僧正集云、出家之後參長谷寺、而小野小町有贈答和歌、

〔徒然草〕下小野小町が事、きはめてさだかならず、おとろへたるさまは、玉造といふ文に見えたり、此文清行がかけりといふ説あれど、高野大師の御作の目録にいれり、大師は承和の始にかくれぬ給へり、小町がさかりなる事、其後の事にや、猶おぼつがなし、

〔小野小町の考〕まづ此小町、老て後おとろへさらばひたりなど云めるは、玉造小町の事なるを混じていへるなり、小町の名高く、古今集の序に出て、六歌仙などかすまへいふより、一人の事と心得て、玉造といひて別姓なるをもわきまへず、小町とあるを、同人と心得たる疎漏ながら、これを混じていへるは、近き世のみならず、古くは建長のころ記せる著聞集五卷三十三丁に、小野小町がわかくて色を好みし時、もてなし、有さまたぐひなかりけり、壯衰記といふ物には、三皇五帝の妃にも、漢皇周王の妻も、いまだ此奢をなさずと書たりければ云々、略○中次第に落ぶれ行ほとには、てには野山にぞさすらひけるとあるは、皆玉造小町壯衰書といふ物に出たる事なり、此文三編だれの書たるといふ事をえらす、世に空海の作ともいへり、是はかゝる人實にありて書たるか、又は作文の爲に、まうけてつくり出たる趣かは、今知がたし、浦島子傳、貧窮問答、新猿樂記などの類にて、作文の爲の假託なるべし、小野小町にはすべてあづからぬ事なるを、かく著聞集の比は